中国の少数民族・侗族の祖母神「薩歳」

薛　　羅軍

筆者は一九八八年から一九九八年まで断続で五次にわたって中国西南地方の少数民族・侗(トン)族の村へ実地調査を行った。本稿はその調査で得られた結果の内の、侗族の薩歳信仰に関する報告である。

侗族の居住地区は、湖南省・貴州省・広西壮族自治区が交わる地域である。一九九〇年の統計によると、侗族の全人口は251万余りである。

前稿「中国の少数民族・侗族の音楽－音楽の分類と侗族歌師の社会的地位について[1]」では彼らの独特な音楽文化について述べた。侗族の人々は誰もが歌を愛し、生活の中に歌が息づいているだけではなく、人と人・村と村との間の様々な儀礼・祭礼も歌を軸に行われる。侗郷はまさに「詩の故郷、歌の海」なのである。侗族の歌曲には抒情的なものから叙事詩まで、規模も日常歌う小さなものから大規模な多段式楽曲まであり、また器楽伴奏によるものや、侗劇と呼ばれる民族劇もある。また、歌師と呼ばれる歌の師匠は人々の尊敬を一身に集め、社会生活において重要な地位を占めている。

本稿では前稿に続き、前述の侗族の音楽文化と密接な関係があり、かつ侗族独自の色彩を帯びている「薩歳」信仰について述べてみたい。

侗族の日常生活においてはなお原始宗教の概念が強く残っており、人々は多くの神々の存在を信じている。山や川、老木や巨石、橋、井戸など、身の回りの様々なものが崇拝の対象となっている。そのため特定の山の土を掘ったり、老木を伐り倒したり、巨石を割ったりすることは一切なされない。違反した者は「地脈龍神」を傷つけ、「風水」をそこない、村に「災難」をもたらす者だと見なされているほどである。ある地方では元日には「水神」を拝み、川や井戸に香を焚いて手向ける。また狩りに出る時には必ず「山神」に祈りを捧げてから獲物をとる。さもないと獲物が得られなかったり、或いは危険な目に遭ったりすると言われている。また火を「火神」として敬い、旧暦の年末に村の全員がお金を出し合い、買った豚を生贄に捧げて火災の起こらぬよう祈る。侗族の信仰するさまざまな神の中には、女性の神が非常に多い。

1　薩歳の呼称

「薩歳」は侗族の人々の祖母神として崇められてきた。その呼称は地域によってまちまちで、薩麻・達麻・薩様・薩翁・薩溜などがある。また、薩歳が祭られている場所は薩堂と呼ばれている。

2　薩堂の建築

薩堂はそのほとんどが村の中心に建てられている。中には村の入口や鼓楼の側に建てられているものや、村のすぐ外に建てられているものもあるが、概して目立ちやすい場所に位置している（**写真 1** および**写真 2**。いずれも貴州省榕江県麦寨村にて 1997.8.18 撮影）。薩堂を建てる時にはまず深さ約 2m 弱、広さ 30～40㎡程度の直方体・立方体或いは円柱状の穴を地面に堀る。そうしてそこに鉄鍋を置き、その中に鍋・三脚・碗・箸・杯など銀製の生活用品や衣服・スカート（裙子）等の紡績製品の複製品を入れる。さらにその上に同じ大きさの鍋をかぶせた後、土をかぶせて覆い、さらにに約 1m の高さにまで土を盛る。例えば湖南省通道侗族自治県地陽坪郷張黄村の薩堂を実測したところ、土包は幅 5m、長さ 7m、高さ 1m である。土包には木犀や千年松、或いは四季花などを植える。薩堂の両側と後方にも野ぶどうや野莉が植えられている。中には屋根を備えている薩堂もある（玉頭薩堂な

写真 1

写真 2

ど）のだが、通常ほとんどの薩堂に屋根はない。薩堂の前には岩が一つ置かれる。

薩堂を建てる際には、まず吉日を選んで薩歳をお迎えする儀式を行う。巫師を務める老人が寿衣（日本でいう喪服）を着て先頭に立って歩く。後に続く青壮年の男たちは芦笙を吹き、女子はスカートをはいて盆をかかげ持ち、古い薩堂や橋のたもと、または河岸・山の麓など、薩歳の住む場所まで行く。そうしてそこから村へ薩歳を導き、新しい薩堂に薩歳をお迎えする。焼香し、お茶を勧めたり爆竹を鳴らしたりする。男は芦笙を吹き、女は「薩歳耶歌」を歌い、前述のように生活用品と紡績用品を埋めた後、すぐに土を盛る。前述の植物以外に牡丹・菊・梅等を植えることもある。このような儀式を経て、伝統的な形式に沿った薩堂を建てるのである。

3　薩歳の祭祀

薩歳の祭祀には次のようものがある。

○普通祭

日本語で縁日というのに近い。陰暦の一日、十五日または新年や節句の折に侗族の村の各家庭では薩堂にお参りして焼香し、お茶や豚肉等をお供えしたり、紙幣（紙銭）を焼いたりする。村によっては薩堂専用の田畑があり、祭祀を行う責任者がいて、毎日朝晩薩堂に焼香し、明かりを灯す。薩歳に全村民の守護と家畜の成長、五穀豊穣を祈願するのである。

○出行祭

侗族には古来から、村同士が互いに招待し合い、芦笙の腕を競う習慣がある（前稿「中国の少数民族・侗族の音楽」参照）。団体で他の村に招かれたり、芦笙の大会を開催したりする時は、すべて薩堂で祭祀の儀式が行われ、神の加護を祈願するのである。

○載時祭。

外敵が攻撃してきた時、村全体の戦闘能力のある男女が武装し、薩堂で行う儀式。守護と戦いの勝利を祈願するものである。

○大祭と小祭

三年に一度の「大祭」と一年に一度の「小祭」がある。祭祀を行う時は豚や鶏を生贄にし、祭壇に香・酒・肉を供え、紙銭を焼く。芦笙を演奏したり、爆竹を鳴らしたりする。そして祭師（琵琶歌師）に薩歳詞を朗誦してもらうのです。

○（唱歌）耶祭

陰暦の正月に各村の青年男女が、互いに自分の村の歌を競う習俗である。薩堂の周辺や鼓楼の中で

歌を競い合う時は、まず薩歳の名を称える耶歌を歌い、薩歳への敬意を表わす。薩歳を称える耶和歌の内容は基本的に同じであるが、その曲調は異なるものが用いられる。例えば、その内容は以下のとおりである。

まず何処に薩歳堂を建てたらよいか
幾千里もの道程をこの地までやって来た
誰が薩祖になったのか
誰が祭師になったのか
誰が薩歳を迎えに遣わされたのか
薩歳は村の何処にありや

4　薩歳を迎え薩堂に帰る

薩歳は侗族の村の平和を守り、人と家畜を繁栄させ、五穀豊穣の御利益がある女神である、と侗族の古老は言う。

さて薩歳女神は時に、薩堂を離れることがある。もし薩歳女神が村の薩堂から離れたら、その村では真夜中に鶏が鳴いたり、人や家畜が疫病にかかったり、また不作になったり水害・干害・火災等の災難に遭ったり、という不時の事態が起こるとされている。このような事態になると、全村民は鼓楼に集まり、薩歳を迎える儀式を行う相談をする。祭師によって選ばれた吉日に薩歳を迎えに行くのである。吉日になると祭師は二人の弟子を連れて道案内をし、二人の若い女性が侗族の民族衣装を身につけお茶を運び、男性は芦笙を吹いてこれに従う。女性の身につけるのは侗族固有のスカート（裙子）である。続いて全村民が参加して爆竹を打ち鳴らし、河岸や橋のたもと、あるいは山裾まで薩歳を迎えに行く。

一九四六年、通道侗族自治県坪坦郷高歩村で薩歳を迎える儀式が行われた。伝え聞いたところによると、事の起こりは国民党政府が強制的に侗族の風習の改革を進め、県知事が侗族女性のスカートをめくったという事件にあった。女神である薩歳はあの世でこの状況を見て恐ろしくなり、薩堂から逃げ出してしまったという。その結果真夜中に鶏が鳴いたり、人々が病気にかかったり、子供に吹き出物ができたりした。巫師が占って言うには、50㎝の長さの野葡萄の蔓と5mの白チガヤがぐるりと囲っている薩堂を探し出し、そこで全村民が黒豚を生贄にして祭らなければ、薩歳は戻って来ないであろう、とのことであった。村人は薩歳を迎えるためのリーダーを決め、野葡萄と白チガヤの薩堂を探し、黒豚を準備して吉日を選び、祭師を招いて薩歳を迎える儀式を行った。式次第に則って、祭師と二人の弟子が先頭に立ち、二人の正装をした侗族の娘が茶を運び、五人の男が芦笙を吹き、青紫色の侗族スカートをはいた四十人の女や老人子供が隊列を組んで、山すそまで薩歳を迎えに行った。古い薩堂に着くと祭壇を置き、豚の頭を一つと豚の腸・肝・肺等の臓物をそれぞれ一碗ずつ供え、香や紙幣を焚き、薩歳を祭った。豚の臓物の碗三つの内の中央の大きな碗は祭師に、両側の小さな碗は弟子に渡した。豚肉は村人達に均等に分けられ、薩堂で分け与えられた豚の脂身を、子供達が急いで食

べた。野葡萄の蔓が薩堂を囲み、白チガヤが薩堂を包み込むようにと乞い願い、祭師は薩歳を祭る祝詞を唱えて、村の平和を祈願した。こうして薩歳を薩堂に迎え、すべての儀式が完了したということである。

5　薩堂のタブー

薩堂の土包の周囲は煉瓦や石の塊を積み上げたもので、雨を遮ることができるような石の祠を建てるところもる。こうした祠の内部は常に清潔にして、厳かな雰囲気を保たなければならない。そのため子供が遊び回ったり、人がその付近でののしりあったり、妊婦が祠の内部や土の山に入ったり、家畜が踏みつけたり、人や家畜が排泄したり、といったことを厳格に禁じている。

また薩堂の草木はたとえ一本でも損なってはならない。このようなタブーを厳格に守って、侗族の老少男女は長年に渉って薩堂を守り、薩歳を崇拝してきたのである。

6　薩歳文化の特徴

以上述べた如く、薩歳は侗族によって古くから信仰され祭られている祖母神である。侗族は侗歌・侗耶・侗款などの祭歌と呼ばれる祭礼歌曲を以て、薩歳を称える祭りを行う。陰暦の毎月一日や十五日には薩歳を思慕して香を焚き茶を供え、新年や節句には酒や肉を供え、香を焚き、紙銭を焼いて薩歳を祭る。また集団で他の村を訪問して帰る際は、必ず相手の村の薩歳に向かっていとまごいをするのが礼儀である。村に水害・干害・火災・風災等の災害がないように、また真夜中に鶏が鳴いたといった不吉な前兆が起こらないように、常に平安無事を祈願して祭りを行う。一年に一度の「小祭」と三年に一度の「大祭」では、人々が健康で、家畜も良く育ち、雨がちょうどよい時期に降って五穀豊穣となるように祈願する。薩堂のある場所では荘厳さを保つために、人や家畜が踏み荒すのを禁忌として厳格に禁じている。

さて、天下最高の祖母神は「薩麻」であり、至上最高の神であるとされる。「達摩天子」や「薩天巴」と同等である。歌はまず先に薩歳の歌を歌い、神を招く時はその前に薩歳道祖神を招く。薩歳を祭る時は、必ず青いネッカチーフ・青い衣装・青いズボン・青いスカートを身に付け、白い服やズボン・スカート等は身に付けてはならない。一九四九年（中華人民共和国成立）までは、薩歳は侗族人々の心の中では至上最高の存在であり、古くから伝わる最大の祖母神であった。

薩歳文化と言う場合、それは薩堂建築・薩堂の生産用具や生活用具・薩歳歌・薩歳耶・薩歳款・薩歳の祭詞・薩歳を祭る為の供え物・薩歳を祭り薩歳を迎える儀式・薩歳に関連する物語や伝説等、薩歳に関連するすべての文化的事象を含んでそう呼ぶ。薩歳文化には迷信めいたものももちろんあるが、それを除けば、人々に教訓を与え、また人々を鼓舞するための良い教材ともなっている。伝説によると薩歳は労働・紡織・歌唱等の達人であり、人々の生産生活を今のように作り上げた功労者でもあった。薩歳は公正誠実であり、喜んで人助けをし、人々の声望が高かった。薩歳文化というものは侗族

にとって、団結して積極的に外敵に対抗するため人々の心をまとめる役割を果たしたと言える。薩歳文化は侗族文化全体にとって一つの重要な要素であり、侗族文化の大きな特徴ともなっている。また侗族民族全体の生存や発展とも切り離せない要素でもある。

一九四九年後、道路の整備や水田耕作などの社会整備は侗族民全体の同意を経て、侗族の人々の自身の手によって推進された。そうした中で坪陽・坪坦の高歩・地陽の老湾の三箇所で、相次いで三つの薩堂が発掘された。それらの古い薩堂からは鉄鍋・杯・銀製の箸・茶碗などが発見された。中でも坪坦高歩の薩堂からは、最も多くの出土品が発見されており、その内訳は銀製の箸（長さ五寸）・碗・杯・柄杓・はさみ・鉄製の台（ものを焼く時に使用）・銅製の壺・ペンチ・三脚・鉄製の鍋・素焼きの壷・磁器製の壷・茶瓶・大鍋・灯明台等であった。

7　薩歳文化の変遷

薩歳文化は侗族の原始形態社会である母系氏族の時代に既に出現していた。最盛期は侗族の封建社会の時期である。侗族社会の発展と変化に伴い、人々の思想も変化していき、同時に薩歳文化も絶え間なく変化してきた。特に中華人民共和国成立以後、社会の物質的条件の変化や科学文化の発展により、侗族の薩歳文化もさらに大きく変化し、しだいに現代文化に取って代わられつつある。例えば、朝に晩に薩堂に香を焚きにいったり、正月一日や十五日に薩堂にお茶を供えたりする人は年々減り、薩歳歌を歌ったり、薩歳を祭る祭詞を詠んだりできる人も減ってきた。新年や節句の度に薩堂に明かりを点けたり、酒や肉を供え、香を焚き、紙幣を焼いたりする人も減った。他の村を訪問して薩堂にいとまごいをする人も、また真夜中に鶏が鳴く不吉な前兆が起こらないように、水害・干害・火災・風害・疫病などの災害に遭わないように、と薩堂に幸福を祈願する人も年々減ってきた。一年に一度の「小祭」や三年に一度の「大祭」も行わなれなくなりつつある。薩堂が道路や水田になってしまったところさえある。侗族民の薩歳に対する観念は年々希薄になってきている。一九四九年以降に生まれた侗族民は薩歳文化にかなり疎くなった。薩歳文化が近代化の波に晒されるのは必然的なことであり、ある意味では社会が発展していくうえで避けられないことなのかも知れない。しかしながら、薩歳文化は一つの民族の歴史として、侗族の長い歴史を後生に伝えていくために、やはり守っていかなければならないと信ずる。

注

(1)　中京大学文化科学研究所『文化科学研究』Vo.14 No.1　2003

平成14年度（2002年）文化科学研究所　研究活動（2002年4月から2003年3月まで）

日　時		テ　ー　マ	講　演　者	場　所
2002年 11月28日	講演会	「中国、崑曲の世界」 今に生きる北曲の古譜 ～ユネスコ世界無形遺産・ 崑曲の歌い方～	いしゐ　のぞむ （長崎総合科学大学）	名古屋学舎 ヤマテホール
2002年 7月9日	第1回 研究例会	「はじめに：チャルトリスキ・コレクションのレオナルド・ダ・ヴィンチ」 「ロシアの詩人チュッチェフ」 「V. S. ナイポールと父親殺し： シヴァとポールとヴィディアダール」 「1492年の登山 －政治権力のメタファーとしての山－」	小田原　謠　子 （中京大学教養部） 郡　　伸　哉 （中京大学教養部） 栂　　正　行 （中京大学教養部） 伊　藤　　進 （中京大学教養部）	名古屋学舎 センタービル 6階06B教室
2002年 9月27日	第2回 研究例会	「現代社会のなかの少数民族の芸術 －中国トン族の事例から－」 （ビデオ上映あり） 「中国の超古代文明論『破解　山海経』 －その奇妙な理論と情熱」	薛　　羅　軍 （文化科学研究所準所員） 明　木　茂　夫 （中京大学教養部）	名古屋学舎 文化科学研究所
2003年 1月29日	第3回 研究例会	「地図帳の怪 －中国地名のカタカナ表記の功罪」	明　木　茂　夫 （中京大学教養部）	名古屋学舎 研究所小会議室
2003年 1月29日	第4回 研究例会	「科学の対象としての文化・再考： 文化の社会学序説」	ましこひでのり （中京大学教養部）	名古屋学舎 研究所小会議室
2003年 1月29日	第5回 研究例会	「ミュージカル『ジキルとハイド』」	玉　崎　紀　子 （中京大学教養部）	名古屋学舎 研究所小会議室
2003年 2月12日	第6回 研究例会	「国土政策と中山間地域」	赤　坂　暢　穂 （中京大学教養部）	名古屋学舎 研究所小会議室
2003年 2月12日	第7回 研究例会	「ラフカディオ・ハーンと歴史的存在」	渡　辺　忠　夫 （中京大学国際英語学部）	名古屋学舎 研究所小会議室
2003年 2月12日	第8回 研究例会	「社会思想と進化論の新しい動向」	河　宮　信　郎 （中京大学経済学部）	名古屋学舎 研究所小会議室
2003年 2月12日	第9回 研究例会	「自閉症スペクトラムの 特異的芸術的才能への支援」	辻　井　正　次 （中京大学社会学部）	名古屋学舎 研究所小会議室
2003年 3月13日	第10回 研究例会	「『愛知児童文化事典』に関わる聞き取り調査報告」 「唱歌『あふげば尊とし』はいかに歌われたか－明治期の卒業式とその機能－」 「賢治と大正期〈四次元〉言説 －『未来圏』・神秘主義・四次元－」	原　　昌 （文化科学研究所準所員） 田　中　克　己 （文化科学研究所準所員） 黒　田　恵美子 （文化科学研究所準所員）	名古屋学舎 研究所小会議室